

全科協ニュース

URL <http://www.kahaku.go.jp/JCSM/index.html>

全国科学博物館協議会 東京都台東区上野公園 国立科学博物館 ☎110-8718 Tel.5814-9857・9858 Fax.5814-9898 平成10年9月15日発行(通巻第162号)

開館からの23年をふりかえる

「秋田県立博物館」

総合博物館における自然系部門の展示

秋田県立博物館は、美術・工芸・歴史・考古・民俗・生物・地質の7部門からなる総合博物館として、昭和50年5月にオープンしました。常設の総合展示を行う第1展示室、各部門毎の展示を行う第2展示室、特別展・企画展を行う第3展示室の三つが当初の展示室構成でした。開館時は常勤職員が総務課14名、学芸課15名でスタートしましたが、現在は総務課7名、学芸課12名で、美術部門は県立近代美術館の開館とともに廃止となりました。開館から21年目の平成9年には入館者が200万人を越えましたが、ここ数年の入館者数は平均して5万人程度で、減少傾向にあります。

開館から10年目の昭和60年に、それまでの活動を見直して長期計画が策定され、さらに平成3年には機能拡充計画がスタートしました。まず常設展示の改編が行われる予定でしたが、それに先立って「秋田の先覚記念室」および「菅江真澄資料センター」が増築されました。現在は常設展示だけでなく、博物館全体の活動を見直しの対象として、リニューアルに向けたプランを策定中です。

1 秋田県立博物館の基本理念

設立に至る過程で昭和47年3月に「秋田県立総合博物館設立構想」が公にされています。「設立構想」を要約すると、以下のような内容になります。

- (1) 博物館は生涯学習の重要な拠点と位置づけられる
- (2) 秋田の学術の中心的存在として、地域学術を振興し、郷土誌の中心となるべきである
- (3) 従来の諸学の寄せ集めの総合博物館ではなく、秋田郷土を自然史的人間史的に総合した、郷土的総合博物館であるべきである
- (4) 展示の構成は、次の3部門からなる
 - ・総合展示 総合的に郷土を把握する展示で、常

設

- ・テーマ展示 いわゆる特別展であり、人文部門や自然部門の独自の研究、または共同研究の成果が反映される展示
- ・分類展示 実物を主体とした、各分野毎の展示で、研究的・学習的な利用が想定される

23年を経過した現在でも、この「設立構想」に謳われた内容が、当博物館の基本理念となっています。それに基づき、「研究の総合化と郷土学の体系化」を博物館活動の基盤としています。

調査研究活動においては、部門独自の活動を重視しながらも、全部門の共同研究としての「地域研究」を行ってきました。

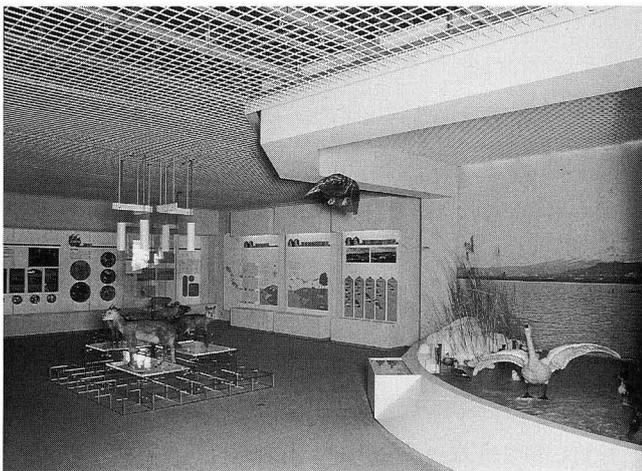
また、展示活動や教育普及活動は原則として調査研究活動や資料収集活動の成果を県民に還元するものと考え、部門独自の研究成果は「部門展」あるいは「企画展」として、地域研究の成果は「地域展」として公開されてきました。しかし、館独自の研究成果だけでは展示に対するニーズに応えきれないため、全国や海外まで視野に入れた「特別展」、東北地方全域を対象とした「東北展」も企画されました。これらは、実質的には館外からの借用資料で構成され、展示構成は当館独自のプランによる場合と企画も含めたパッケージ展示を行う場合の両方があります。特別展・東北展・地域展が原則として3年サイクルで実施され、地域研究はそれぞれ3年計画で行われるという展示と研究の組み合わせは開館後3年で確立し、昭和62年まで続きました。昭和63年からは、各年とも特別展が1回行われ、地域展は平成元年度を最後に休止しています。これは、前述の長期計画や機能拡充計画にともない、地域研究が研究の総合化の役

割を果たしてきたのかなど、反省と見直しが行われたためです。

2 部門展示の経過

当博物館の展示構成は、基本的に前述の「設立構想」によっています。この中で「部門展示」は、各部門の専門性を生かした分類展示であり、実物資料を中心とし、研究的・学習の利用をねらいとすることは、前述のとおりです。

しかし、この展示室の役割として、常設の総合展示の補完と、研究活動や資料収集活動の最新の成果の公表の場という性格が、開館当初から加わっていました。特に生物部門展示においては、総合展示の時間軸に沿った構成に現生の生物を扱った部分が入ることができなかったため、部門展示の中に現生生物を扱った常設展示があります。また、地質部門展示においても、総合展示の中ではスペースが不足して展示できなかった実物資料をできるだけ多く展示しようという、補完的な意図がありました。



昭和50年当時の生物部門展示室

実は生物部門展示は、開館後間もない昭和53年度に全面展示替えを行っています。それ以前の展示は、分類展示の意図が強く現れた構成で、網羅性や地域性に配慮したものでした。可動性に配慮し、ジオラマもごく一部にしか使用していませんでした。しかし、平板だ・教科書的だ・楽しさがないなどさまざまな批判もあり、全面展示替えに至ったものです(この間の経緯については、「秋田県立博物館研究報告 第4号」に当時の担当者の詳しい報告があります)。現在は半分はジオラマ、残りは小テーマ展示の集合という構成になっています。どちらの展示がよいかという議論はさておき、設立構想で述べられた部門展示の役割とは離れてしまった部分が増えたということは言えそうです。前に

述べたように部門展示にさまざまな役割を負わせてしまったのですから、当然の結果かもしれません。

その一方で、最新の活動成果の公表の場として、また取蔵資料の公開の場として、部門ごとに展示替えが頻繁に行われてきました。生物・地質両部門だけでも23年間で35本(オープン時の展示を除く)の展示が行われてきました。このように、特別展・企画展以外に、頻繁にかつ定期的に展示替えが行われていることは、当館の部門展示の大きな特色と言えるでしょう。こうした性格の展示室は、ある程度の規模の博物館では散見することができます。例えば神奈川県立生命の星地球博物館の「ジャンボブック」の展示室は、館全体の展示構成内の位置づけに違いはあるかもしれませんが、私たちとしても大いに共感できる展示です。「自然史」という人間の行為を展示で表したいという意志が、共通して底流にあるのではないかと考えています。

さて、部門展示は分類展示という性格を持つものですが、分類展示というよりも小テーマ展的な内容の展示も少なからず実施されてきています。従って、第3展示室で「企画展」として実施されている展示との違いがやや曖昧になっている感もあります。特に生物部門では、生態的な側面が全面に出た展示があります。例えば「風を利用する植物」「クロマツ林の鳥類」「雑木林の昆虫」などは、タイトルからもそれが伺えます。地質部門でも「秋田の油井掘り」のようにテーマ性の強い展示もあります。

一方で、分類展示の姿勢を堅持した展示も多く行われてきました。地質部門では、内容を入れ替えながらも秋田の化石や秋田の鉱物の展示が繰り返行われています。生物部門では、貝類、カニ、淡水魚など比較的ポピュラーなグループだけでなく、蘚苔類、地衣類など、地味なグループも取り上げられてきました。

全体を平均してみると、この二つのタイプの展示が約半々の割合で行われています。これは必ずしも意識されてきたわけではありませんが、見る側にとって親しみやすく話題を提供できる展示を行おうとする姿勢と、秋田の自然を網羅して紹介したいという姿勢のバランス(あるいはジレンマ)の上に成り立っていると言えるでしょう。

3 現在の部門展示室の構成と運営

部門展示室は691m²あり、その約半分を生物部門展示が占めています。

生物部門展示のうち図の下半分はジオラマを中心とした常設展示になっており、上半分のうち左側の半分も作りつけの展示のため実質的に小テーマの常設展示となっています。残りのスペースは、基本的に毎年1～2カ所ずつ展示替えが行われています。

地質部門展示は基本的には全体が可動の展示でしたが、男鹿半島の地質を扱った部分は大がかりな展示装置があるので簡単には展示替えできないため、実質は常設となっています。その他の三つのコーナーは、それぞれ部分あるいは全面の展示替えが時々行われています。

工芸部門の展示は、かつては美術部門とともに第3展示室の半分を使って行われていましたが、現在はごく限られたスペースで行われています。

民俗・歴史・考古の3部門の展示は壁面に作りつけの展示ケースと可動式の展示ケースを使い、原則的に年1回、ほぼ全面展示替えを行っています。ここ数年考古部門では、埋蔵文化財センターの速報展も行い、年2回の全面展示替えになることもあります。また、この3部門の展示スペースは、昭和63年以来、年1回の特別展の展示スペースとしても使用されています。

現在の生物部門と地質部門の展示構成は次のようになっています。

生物部門展示

第1室（平面図で下の部分）「自然の中の生き物」

オープンジオラマを中心に、秋田の自然を生態学的な立場から総合的に展示しようとしたものです。この部分は可動性は全くなく、常設展示になっています。

ジオラマは「森林の初夏(カモシカの生態)」「森林の秋



生物部門展示 オープンジオラマ（常設）

光と音で場面が移り変わるよう演出されている

（クマの生態・キツネの生態）」「水辺の冬（水鳥の生態・イタチとウサギ）」からなっています。

また開館当時の中学校理科のカリキュラムを意識して、食性と関連した形態的適応を取り上げた「鳥のくちばしとあし」「けもの歯」という剥製や骨格標本による展示があります。

第2室「テーマ展示」

いくつかの小展示が集合した構成になっています。半分は人間のくらしと密着したテーマで、可動性はなく常設になっています。この部分の展示は以下の構成になっています。

「花と虫」

花に注目した野菜の系統分類、虫媒花、都市に進入する外来昆虫などを取り上げています。



生物部門展示 花と虫（常設）

クイズ形式にして利用者が参加する形を取り入れている

「有毒・有害な生き物」

人間に危害を及ぼす生物を標本で紹介しています。

「針葉樹と広葉樹」

顕微鏡で木材の組織の違いを観察できるほか、触れる材幹標本も置いています。

「高山植物」

秋田駒ヶ岳をモデルに、主に乾湿による立地の違いに対応した植物の配列をレプリカで表現しています。

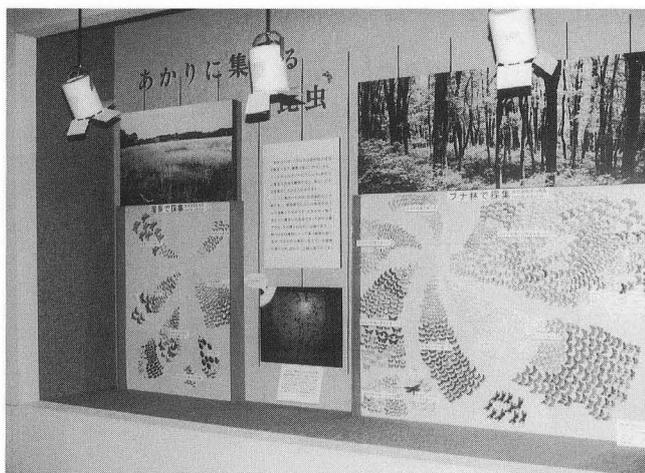
「雪と生物」

日本海側の多雪と太平洋側の少雪による生物種分化と分布を取り上げています。このコーナーは研究的な展示コーナーとして2年程度で展示替えをする意図がありましたが、その後全く展示替えが行われず、最近になって新しい知見などによって若干の変更が加えられました。

残りの半分は可動展示で、幅約4mのコーナー四つに分かれています。

「秋田のカニ」「秋田の淡水魚」はまさに分類展示ですが、カニでは生息環境を自作の小ジオラマで示し、淡水魚では系統分類ではなく在来魚と外来魚に分けて配列し、絶滅のおそれがある種も取り上げています。

「あかりに集まる昆虫」は、ブナ林と博物館に隣接する湿原とで一晩で灯火に集まる昆虫相を比較する構成になっていますが、種名を示すラベルなどはいっさいなく、むしろ灯火に集まる昆虫の多様性を表現する意図があります。



生物部門展示 あかりに集まる昆虫 (可動・平成9年より)
部門担当者が日頃行っている灯火採集の場面を展示に取り入れようと試みた

「雑木林の昆虫」ではチョウとその餌となる植物との関係、樹液に集まる昆虫を取り上げています。このコーナーは下部に引き出しがあり、関連する多くの標本を見ることができるように作られています。しかし、実際に標本が置かれていた期間はわずかで、ほとんど利用されてきませんでした。利用者にとって使い勝手があまりよくないことと、次々に消耗していく標本の補充が困難だったことが主な理由のようです。

地質部門展示

「秋田の化石」

秋田県産の化石を展示しています。常に人気のあるコーナーで、部分的に展示替えをしながら継続しています。現在は次の5テーマで展示中です。

- ①比べてみよう —木の葉・木の実の昔・今—
- ②骨・うろこ・歯 —魚の残したもの—
- ③何の化石だろう —さまざまな無脊椎動物化石—



地質部門展示 全体

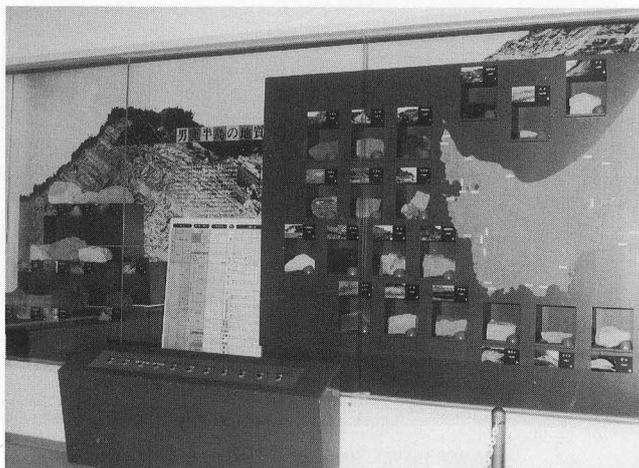
- ④秋田の海から姿を消した貝Ⅰ —絶滅した貝たち—
- ⑤秋田の海から姿を消した貝Ⅱ —逃げ出した貝たち—

時代ごと、産地ごとの分類展示ではなく、来館者が興味を持って資料を見られるようなテーマを設定しています。それぞれの資料数はそれほど多くはありませんが、現在生きている近縁な種の標本と並べるなど、わかりやすい展示をめざしています。

「男鹿半島の地質」

男鹿半島は古くから多くの地質学的研究がなされ、その新生代の地層は日本海側グリーンタフ地域の標準層序とされています。部門展示室では開館当時からこのコーナーを設け、地質模型や岩石・化石を展示しています。男鹿半島の代表的な岩石を産地の写真と一緒に展示するうえ、当館が男鹿半島の入り口付近に位置していることから、半島での地質巡検の行き帰りに立ち寄る学生や研究者の皆さんもたくさんいます。

現在は大きな地形模型に標本を組み合わせ、地層名の



地質部門展示 男鹿半島の地質

ボタンを押すと代表的な産地及び標本に照明がつくようになっていきます。ただしこのシステムは装置が大きいため展示替えが簡単にできず、実質的には常設展示になっています。

「秋田の油井掘り」

日本で開発された陸域の油田の中で、最も規模が大きいものは秋田市の八橋油田です。昭和30年代には石油やぐらが林立していました。第1展示室の常設展「秋田の深海時代と石油の形成」コーナーでは、含油層の地下構造や石油鉱床の探査と採油のパネル・岩石標本などを展示しており、これに関連する部門展示として、新しく収集した標本をもとに、これまでの秋田の油井掘りのあゆみを紹介しています。

「県内産の鉱物」

このコーナーでは、鉱山県秋田にちなんで「鉱物」に焦点をあてた展示をシリーズ化してきました。現在の展示はシリーズ5回目で、当館で収集した鉱物を「鉱床から産出した鉱物」というテーマに沿って展示しています。

4 これからの部門展示

部門展示のこれからのあり方を考える上で、二つの問題があると思います。一つは調査研究や資料収集活動との関わりです。頻繁に展示替えが行われる当館の部門展示の場合、展示の背景に活発な調査研究・資料収集活動が必要不可欠です。しかし実態は、展示や普及など直接表に出る活動が優先され、展示のために調査し資料を集めるという、理想と比べると本末転倒というべき状態にあります。また自然系の場合、県内にプロ・アマチュアを問わず研究者が少なく、分野も偏っているため、館外の協力を仰ぐにも限界があります。これは開館当初にも指摘されていたことで、展示や普及活動を通じて裾野を広げていくことの必要性が主張されていましたが、20年あまりを経過した現在でも、問題は好転せず、むしろ研究者層の高齢化が心配されています。

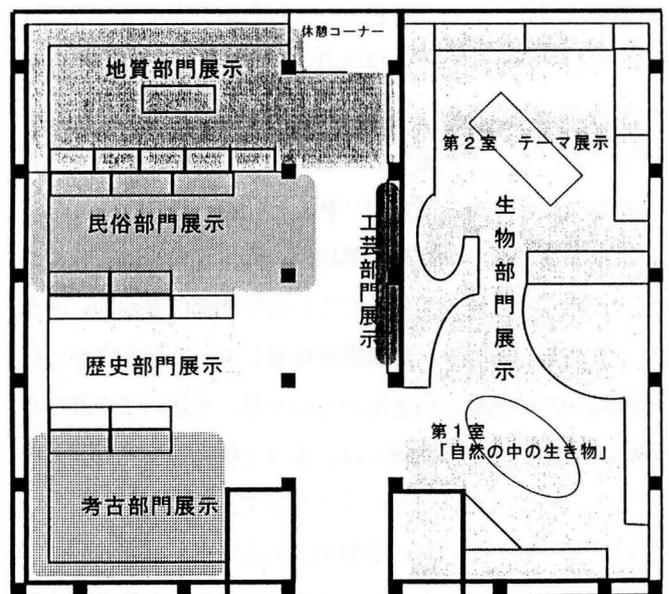
また、部門担当者自身の問題もあります。現在は生物部門担当2名、地質担当1名という構成ですが、なかなか全部をカバーすることができず、得手不得手が部門展示に直接反映されてしまいます。当館の自然系部門担当者はいずれも学校現場からの転勤で、数年でまた戻っていくという人事になっています。県内の自然史研究者不足は、これか

らの博物館を担っていく人材の不足という面でも深刻な問題です。

もう一つの問題は、館全体の構成の中で部門展示の役割を明確にできるかという点です。特に総合展示との関わりが重要と思われます。

現在の展示構成の中には、秋田の自然全体を概観できる導入的な展示が不足しています。地質については第1展示室の総合展示で地史の概略が展示されています。地質部門展示には全県の地質模型がありますが、対応する標本は置かれていません。生物部門展示では例えば植生帯の分布など全県を概観する展示はどこにもありません。いわゆる教科書的なものかもしれませんが、網羅的に展示できない以上片手落ちではないかと思われます。本来こうした部分は、総合展示が担うべきものでありましょう。また、自然環境の保全や、人間活動と自然との関わりは、今日利用者側が大変ニーズのあるテーマであろうと思われます。しかしこれは、まさに常設の総合展示にこそふさわしいテーマであり、部門展示はより探求的な利用に対応すべく分類展示や新しい話題の提供を担うべきではないかと思います。当館全体の展示構成においては、総合展示と部門展示は強く関連するものです。総合展示が理想的に総合を実現できてこそ、部門展示も明確な役割を持ちその機能を発揮できるのではないのでしょうか。

これら二つの問題は、総合博物館であるがゆえの問題とも言えます。博物館としての規模は小さくないものの、自然系部門担当者の数は限られざるを得ません。総合展示に



第2展示室平面図

県内の自然の概観や人間と自然の関わりを取り上げたいと考えるのもあくまで自然系部門担当者の希望にすぎず、人文系の取り上げたいテーマとの調整を行っていくと、全くスペースが足りなくなってしまう。現在の総合展示でも、民俗や工芸に関わる内容のごく限られており、単に自然系か人文系かというだけの問題ではなく、どの部門にしても不足を感じる部分はあります。この総合展示の問題は、開館以前から現在に至るまで全く同様の議論が繰り返されてきています。いろいろな分野から秋田の概略を紹介したい、全体として筋の通ったテーマとシナリオで構成したい、さまざまな側面からの視点を統合した秋田像を提示したいなどの、欲張りとも言えるさまざまな要求を吸収しきれず、総合展示もまた明確な役割を示せずにいると見ることができます。当館の設立構想の中心命題であった「総合」は展示だけを見てもまだまだ実現できているとは言いかねます。秋田県立博物館が秋田県唯一の総合博物館であるかぎり、これからも繰り返し議論されていくことになるでしょう。

部門展示をとりまく問題は、いずれも短期間に解決できるものではないようです。とはいえ、現在の状況で可能な限り、機能を発揮させなくてはなりません。現時点での考えをいくつか述べてみたいと思います。

まず部門展示が取り扱う領域の広さについてです。前に述べたとおり、各部門担当者の数は限られており、当然ある程度以上の専門性を持ってカバーできる領域も限られます。しかし、これは多少人数が多くてもさまざまなレベルで生じる問題です。多少領域が狭くなっても、むしろ「この領域は得意」という特色として打ち出す方がよいのではないのでしょうか。むろん担当者は数年で入れ替わってしまいますが、それぞれの担当者が自分の得意分野を打ち出せばよいのです。これまでも、地質部門では第四紀の貝化石を得意分野とする担当者が「秋田の化石」コーナーで内容を入れ替えながら一貫して第四紀の貝化石を扱ってきました。また、昨年度から展示している生物部門展示の「あかりに集まる昆虫」は、日頃蛾を採集している担当者が、灯火採集の際の感動を伝えたいという思いを込めて企画した展示です。このような展示は、もっと積極的にアピールしてもいいのではないかとことです。これは、ある意味では「学芸員の顔の見える展示」あるいは「博物館の研究活動が見える展示」とも言えます。もちろんこうした姿勢を維持するためには、担当者が活発な研究・資料収集活動

を続けて行かなくてはなりません。

こうしたねらいを生かすために、例えば「ここを見れば秋田の蝶が全てわかる」というような徹底した分類展示とか、研究の過程を展示化する、さらには地域住民参加で次第にできあがっていく展示とか、いろいろなアイデアがありそうです。

もう一点、部門展示が研究的・学習的なねらいを持っているとすれば、そのねらいを生かすためには眺めるだけの展示ではなく、別の手法も取り入れるべきでしょう。例えば触れることのできる資料を増やす、必要に応じてより詳しい情報や関連する情報を引き出せるような設備を置くなどです。こうした機能はリファレンスの機能と大きく重なるものです。リファレンスのためのスペースと強い関連づけをする、あるいは展示室が丸ごとリファレンス空間であるなどの発想が必要となるでしょう。部門によってはこうした性格を打ち出すことは難しいかもしれませんが、自然系部門の場合は決してむずかしいことではないと思います。部門展示なのですから、各部門の手法が横並びでなくてもいいのではないのでしょうか。

こうした展示のあり方は、一面実験的であり、ともすれば展示を作る側の自己満足になってしまう危険性もあります。しかし、それぞれの面積が限られ、頻繁に展示替えを行う部門展示だからこそ可能な実験です。もちろん、利用者の反応については注意深いモニタリングが必要で、その結果をフィードバックしていく必要があります。しかし反応の平均を取ってしまえば、可もなく不可もなくというフィードバックになりかねません。年齢・地域など特定の利用者層に対してであっても、喜んでもらえ、あるいはインパクトを与えることができたなら評価すべきでしょう。

現在の部門展示をとりまく状況には不満な点も少なくありませんが、その状況を逆手にとって積極的・攻撃的な運営を心がけていけば、博物館の特色を打ち出せる場になるのではないかと期待を述べさせていただきました。なかなかくろみどおりには行かないでしょうが、わずかずつでも変わっていくことができれば、利用者にも博物館が生きて動いていることを感じてもらえるのではないかと思います。

— 全科協情報 —

＜研究助成募集のお知らせ＞

財団法人日本科学協会から全科協を通じて下記のとおり募集の案内がありましたのでお知らせします。

記

平成11年度笹川科学研究助成募集要領

1. 対象となる領域ならびに申請区分

人文学、社会科学および自然科学(医学を除く)、またはそれらの境界領域に関する研究。なお、本年度は上記領域を次の申請区分に分けます。

- (1) 一般科学研究
- (2) 学芸員・図書館司書等が行う研究
- (3) 海洋・船舶科学研究

2. 募集の対象者

平成11年4月1日現在、35才以下の者であって、次の条件を満たす者。ただし、大学院生、学芸員および図書館司書等にあつては、その限りではありません。

＜応募条件＞

- (1) 平成11年4月1日現在、大学院修士課程ならびに博士(前期・後期)課程に在籍する者および進学予定者

- (2) 大学院生と同等以上の能力を有する者
- (3) 大学、研究所、研究機関、教育機関等において研究活動に従事するもの。
- (4) 博物館(含む類似施設)で学芸業務に従事している学芸員等および図書館で情報処理等に関し研究活動に従事する司書等

3. 助成期間

平成11年4月1日から平成12年2月15日までに研究が完了し、成果をとりまとめられるもの

4. 募集期間

平成10年9月1日(火)から平成10年10月30日(金)〈必着〉

5. 申請書の申し込み方法

申請書のお申し込みは、e-mail、Faxもしくは、官製ハガキにて郵便番号、住所、氏名、電話番号および希望部数を明記の上、連絡すること

※連絡先 財団法人日本化学協会笹川科学研究助成係
〒105-0001東京都港区虎ノ門1-11-2第2船舶振興ビル3F
Tel 03-3502-1931 Fax 03-3580-8157
E-mail LDG01360@niftyserve.or.jp

**めざすのは
「小宇宙」の実現です。**

NOMURA
株式会社 乃村工藝社

本社/東京都港区芝浦4-6-4 〒108-8565 電話03-3455-1171(代)
ホームページ <http://www.nomurakougei.co.jp>

ディスプレイおよび建築の調査・コンサルティング・
企画・設計・デザイン・プロデュース・演出・制作施工

COLORATA.

ミュージアムグッズの企画・制作・販売・輸入
カロラータ株式会社

本社・企画室 東京都台東区浅草橋4-6-8 西澤ビル TEL.03-3865-8110 FAX.03-3864-4049
営業部・商品管理部 〒136-0072 東京都江東区大島2-13-11 TEL.03-3684 8311 FAX.03-3864-8310

美術

はく製

〈各種生物〉
剥製・骨格標本・レプリカ
加工/販売/リース

有限 東洋近代美術研究所
会社

製作所 〒272-0816 千葉県市川市本北方2-18-1 直通 ☎047-337-5678
☎047-337-5883
FAX 047-338-1978
本社 〒272-0834 千葉県市川市国分5-3-25 ☎047-374-1564

※世界の化石・
鉱物・恐竜・化石
人類・動物骨格
標本及び模型の
輸入専門業者

ティラノサウルス・REX

株式 ゼネラル サイエンス
会社 コーポレーション

〒107-0052 東京都港区赤坂3-11-14 赤坂ベルゴビル802
TEL 03 (3583) 0731代表 FAX 03 (3584) 6247

海 外 ニ ュ ー ス

安井亮事務所

豪州キャンベラに、新しい科学館が1999年に開館予定

1999年10月の開館をめざして、オーストラリアの首都キャンベラで、新しい科学館『ディスカバリー』(Discovery)の建設が進んでいる。同館は、オーストラリアの国立総合研究機関であるCSIRO(Commonwealth Scientific and Industrial Research Organisation)によって計画されており、6,000平米の建築延べ床面積をもつ計画施設には、展示ホール、教育施設、一般を対象としたバイオテクノロジー実験室、レクチャー・シアター、カンファレンス・ホール、カフェテリア、ショップ等が設けられる。展示および教育プログラムを通じて、CSIROが取り組んでいる農業への遺伝子組み換え技術への応用と、地球の温暖化現象への対応や、オーストラリアの豊富な天然資源の採掘とその加工に関する研究開発の成果が紹介される。また将来遠隔地への教育プログラムとして、巡回展示が計画されており、遺伝子工学関連のテーマや、農業における水の利用、生物多様性に関するものが紹介されることになっている。対象観覧者は、広い年齢層を想定しており、青少年に関しては12歳以上に設定している。総額19,000,000AUSドルの総工費はオーストラリア政府の他に、同国の通信衛星会社・オプタス社からの寄付で構成されている。開館後の最初の12ヶ月の入館者は230,000人が見積もられている。立地される付近には、オーストラリア国立大学とオーストラリア国立植物園などがある。(イメージ図参照)

米ディスカバリー科学館、1998年秋にリニューアル開館

1998年秋の開館をめざして、現在カリフォルニア州サン

タアンナにあるディスカバリー科学館(1993年開館)では施設の大々的なリニューアルが行われている。今までに施設は520平米の小規模施設だったが、このリニューアルによって、建築延べ床面積約5,500平米の新しい施設に生まれ変わる。ハンズオンを重視した展示の他に、コンピュータ・ルーム、教室、実験シアター、3Dシアター、ショップ、レストラン等が設けられる。館名も新に、大口寄付者である通信会社の名前を冠して、タコ・ベル・ディスカバリー科学館に生まれ変わることになっている。

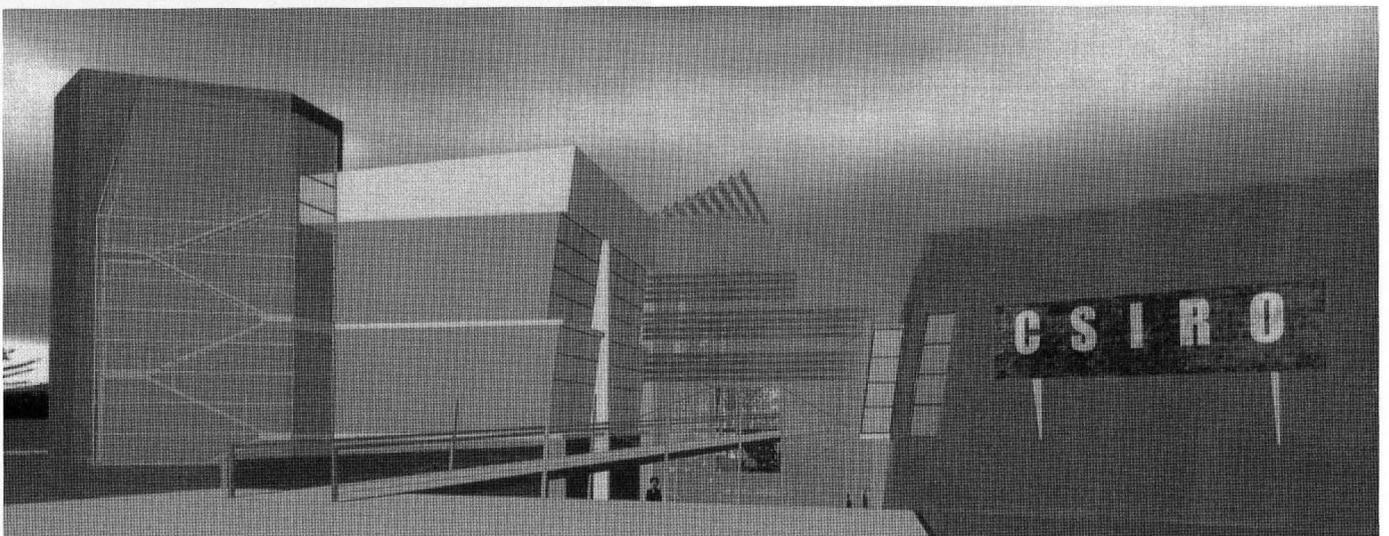
バポール(イラン)に5,000平米の科学館を建設中

イランのジラクザデス科学財団(本部:テヘラン)は、カスピ海に近い小都市バポールに、1999年2月の開館をめざして科学館の建設をすすめている。計画施設は建築延べ床面積が5,000平米。同財団は既に過去4年の間に次々とテヘラン周辺に、地元の自治体の協力を得ながら、3館の科学館を開館させてきた。計画施設は、バポール在住の実業家ハリリ氏から土地の無償貸与と寄付を受けて設けられることになった。

展示装置の大部分は参加体験型のものによって構成され、エキスポラトリウム、ラ・ビレットおよびロンドン科学館のローンチ・パッド展示ホールの展示をモデルにして制作されることになっている。

米イサカ古生物学研究所に新しい展示館を増設

ニューヨーク州イサカにある古生物学研究所(Paleontological Research Institution)に、2001年のオープンをめざして、展示館『地球の博物館』(Museum of



ディスカバリーの完成予想図 (Courtesy of the Commonwealth Scientific and Industrial Research Organisation, Canberra Australia)

the Earth) を新しく設けることになった。常設展示では、ニューヨーク州一帯の10億年の歴史が紹介される他に、イサカ市周辺を形成するフィンガー湖水地方のデボン紀の地層、氷河期、中生代の地層をそれぞれ紹介する展示コーナーが設けられる。また館内に19世紀中旬に同地区にあった交易場が復元され、そこで子ども達は自分の化石を持ち寄って、他の子どもの化石と物々交換できる場が用意される。新生代の古生物学と地質学に業績を残したイサカ大学教授ギルバート・D・ハリス博士(1864-1934)が私財を投じて設立した古生物学研究所は、約3,000,000点の無脊椎動物の化石を所蔵し、この分野ではアメリカでは最も整理され、また最大のコレクションでもある。現在1,674平米の研究所は、イサカ市にあってカユガ湖を見下ろす約2.4ヘクタールの広さの敷地を有しており、新しい展示館は同じ敷地内に完成する。計画施設の建築延べ床面積は1,395平米であり、展示面積は744平米である。総工費は総額6,400,000ドル。

リバティー科学館、心臓手術を紹介する展示をオープン

このほど1998年春に、リバティー科学館(ニュージャージー州ジャージー・シティー)は、約40キロ離れたアトランティック・ヘルス・システム・モリスタウン記念病院の協力を得て、同病院で行われる心臓外科手術の一部始終がライブで見られる展示施設『心臓外科クラスルーム』を設けた。手術室に設けられた3台のビデオ・カメラから送られてくる映像によって、人工心肺維持装置の着脱とバイパスの埋込みの手術進行の様子がライブで大型モニターで見られるだけでなく、手術室内の控えの看護婦との間にビデオ会議の技術を使って質疑応答ができるようになっている。

ノースカロライナ自然科学博物館、常設展示を拡張

ノースカロライナ自然科学博物館(ノースカロライナ州ラレー)は、スカンジナビア航空から総額1,000,000ドルの寄付を受けて、1999年末の完成をめざして、常設展示の拡張を行っている。スカンジナビア航空からの寄付は、アメリカの博物館として企業から受ける資金提供としては最大の金額だ。

ニューヨーク科学館、視覚障害者へ解説システムを開発中

現在、ニューヨーク科学館では、全米科学振興基金から総額186,377ドルの助成と米国 NEC 文化財団から総額20,000ドルの助成を受けて、視覚障害者のための展示解説支援システムの開発を行っている。開発中の解説システムは、音に関する展示コーナーと、光に関する展示コーナー

で用いられることになっている。

新しいホームページ

Casa De Las Ciencias and Domus. La Coruna, Spain <<http://www.casaciencias-lc.ed>>

City of Arts and Science. Valencia, Spain

<<http://www.cac.es>>

Teknorama. Stockholm, Sweden

<<http://www.telemuseum.se/tekmu>>

Discovery Center Museum. Rockford, USA

<<http://www.usa.net/~discntr>>

Discovery Center of Science & Technology. Bethlehem, USA

<<http://www.lehigh.edu/~insma/index.html>>

Discovery Place. Charlotte, USA

<<http://www.discoveryplace.org>>

Discovery Science Place. Tyler, USA

<<http://www.tyler.iamerica.net/discovery>>

East Tennessee Discovery Center. Knoxville, USA

<<http://funnelweb.utcc.utk.edu/~logan/etdc/>>

Edgerton Exploit Center. Aurora. USA

<<http://www.hamilton.net/aurora/city/edgeton.htm>>

Entergy. New Orleans, USA

<<http://www.auduboninstitute.org>>

Florida Adventure Museum. Punta Gorda, USA

<<http://www.charlotte-florida.com/museum>>

Fresno Metropolitan Museum of Art, History & Science. Fresno, USA

<<http://www.fresnet.org>>

Hagley Museum. Wilmington, USA

<<http://www.hagley.lib.de.us>>

Hastings Museum. Hastings, USA

<<http://www.hastingsnet.com/museum/index.html>>

Headwaters Science Center. Bemidji, USA

<<http://www.northnet.com/science>>

Health Adventure. Asheville, USA

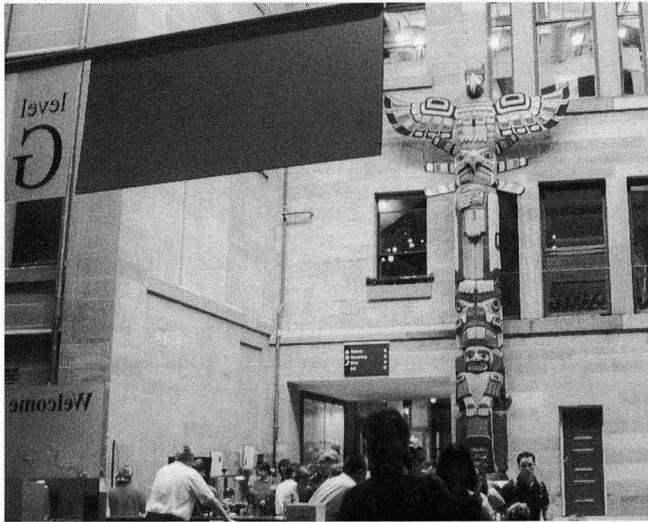
<<http://www.health-adventure.com>>

*安井亮事務所: Fax.0427-36-5916

E-mail:QFH03327@nifty.ne.jp

海外科学系博物館視察研修(その4)

オーストラリア博物館 (シドニー)



オーストラリア博物館

○管理・運営について

オーストラリア博物館は、自然環境や人間社会、人間と環境の相互作用についての知識の増進と人々の議論への寄与を目的に1827年に創設(ニュー・サウス・ウェルズ州文化活動省所属)された。現在の場所に移ったのが1846年で1980年に新館を増築した。職員数は、先住民のアボリジニ人及び身体障害者を含め300名で組織され、内、身体障害者職員を18人雇用しており、これは全職員の5.5%にあたる。

雇用上、アボリジニ人の積極的採用により州政府から表彰されており、先住民の文化遺産の保存等についても積極的な役割をはたしている。アボリジニ人の人類学的展示については、12人の展示委員の内、4人がアボリジニ人のメンバーであり、意見を取り入れている。

入館料は、設置当初から無料であったが、財政事情等により、大人5ドル、子供2ドルの入館料を1992年2月から徴収している。

組織は、ニュー・サウス・ウェルズ州文化活動省を筆頭に、評議会(オーストラリア博物館は、オーストラリア博物館評議会によって監督されており、オーストラリア博物館長が、評議会の事務局長となり、構成員は9名で2カ月ごとに会議を開催している。)、総務部門(人事、会計、施設、建物担当)、学芸部門(人類、地球・環境、情報科学、無脊椎動物、脊椎動物、資料保存部門及び研究センター)及び

普及、教育、展示部門からなり、友の会(1972年設立、現在7,000人の会員がおり、会費は、個人会員55ドル、家族会員70ドル、企業会員125ドル、維持会員及び特別会員250ドルで会員の特典としては、入館料無料、特別展の入館割引、ネイチャーオーストラリア(季刊誌)及び友の会イベント等案内誌の送付、ミュージアムショップ1割引制度がある。「オーストラリアの鳥」「鉱物の惑星」などの展示のスポンサーとして財政的に大きな支えとなっている。)も運営している。

財源の4分の1は、博物館独自で収入を得なければならず、ビジネス担当部門を中心に入場料、ミュージアムショップ、会議等の貸し会場、企業の寄付等、財源確保に努めている。

入館者は、26万人で内訳は、家族が30%、生徒20%、観光客10%、その他40%となっている。

<国立科学博物館 教育部企画課長補佐 増田光尚>

○教育普及活動について

会議室で質問会が行われた。われわれの質問に答えてくださったのはモーガン副館長以下各担当の方々であった。教育普及活動担当は、キャロライン・マカーラックさんと言う女性の方である。(他の館も含めて、どうも教育普及担当の方に女性が多いと感じた)

私たちの質問は、

- Q 1、学校教育と、どういった連携を取っているか?
- Q 2、巡回展のようなプログラムを持っているか?
- Q 3、学校に対しての展示の貸し出しを行っているか?
- Q 4、教員に対しての教育プログラムを持っているのか? また研修を行っているのか? であった。

それに対して館側の答えは、

A 1、学校教育とはかなり密接に連携をしている。教育省が展示に合わせてカリキュラムを組んだり、プログラムを組むときに教育省の参加があったりする。

年間入場者数26万人(97年)の内5万5千人が学生の入場者で、7万人に資料を送付している。(ちなみに直接の館への入場者の構成は、30%がファミリー・20%が学生・10%が旅行者・残りが大人やグループ他)

A 2、巡回展は行っているが、学校で展示するのではなく

各地の博物館で行う。巡回展での入場者数は100万人である。

A 3、ミュージアム イン ボックス (内容はビデオやコンピューターソフトなども入っている教師用の物)が800セットあり、希望する学校には3週間貸出される。

A 4、教員研修については、4～5回/年の教師向け研修があり、教師のタマゴについての教育も行っている。講師を通して教育する場合と、直接館で教育する二つのパターンがあるとのことであった。

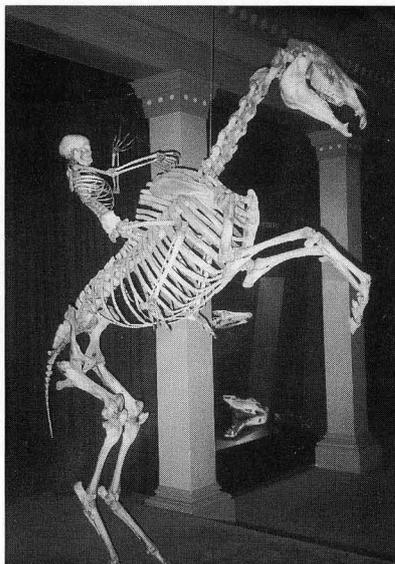
全体として、学校教育に対してかなり影響力を持って活動しているという印象を受けた。

〈株式会社 乃村工芸社 文化施設事業部 藤井秀人〉

○展示について

歴史が古く伝統ある博物館の多くは、建物の内部空間が固定化され、新しく展示を更新する際に著しく使いづらいという難点がある。建物自体に文化的な価値がある場合も多く、簡単に建て替えるわけにも行かない。展示情報は時代とともに変化し増殖していくが、それを展示する容器である建物は変化できないアンバランスさを生み出してしまふ。また、コレクション型の展示から、近年は映像演出や情景演出を駆使した体験・体感型の展示が主流になり、空間が固定化されているとおのずと行える演出は制限を受けてしまふ。

オーストラリア博物館は国内でも最も歴史のある博物館であるが、同様のことを感じた。常設展示はオーソドックスなコレクション展示が主体であり、哺乳類の骨格標本や鉱物標本の展示が重厚な石造りの建築物の中で展開されている。コレクションの質が高いため見応えはあるが、現代



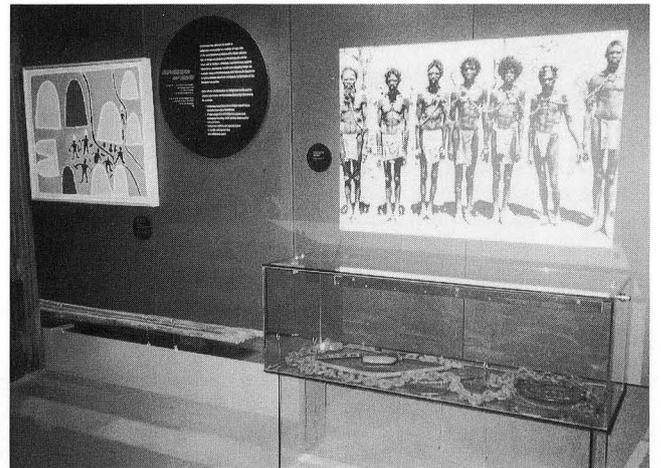
常設展示室 骨格標本の展示

的な展示演出とは言い難い。

しかし、企画展示では限られたスペースの中でも体験・体感型の演出を取り入れる試みが活発になされていた。視察時は「くも (spider)」に関する企画展示が開催され、ダイナミックな演出は無いものの子どもたちの興味を引き付けるのに十分な配慮がなされた展示であった。

オーストラリアでは巡回展が活発であり、充実した企画展示が開催しやすい環境にあると考えられる。また、博物館の内部スタッフが自館の展示はもちろん、巡回用の展示アイテムや学校貸出用の教材等を企画・立案するため、効果的に学習をさせる演出のノウハウが博物館内に蓄積されている。このため、様々な趣向を凝らしたきめ細かい展示の実現が可能なのであろう。

また、興味深かったのはオーストラリアの先住民を扱ったメッセージ性の高い展示である。



オーストラリア先住民の展示

オーストラリアではこれまで、白人と先住民の間で歴史上様々な社会的問題があった事を紹介し、今なお解決されていない問題も積極約に取り上げている。このようなイデオロギーに関するテーマを扱った場合、展示開催のためには大変な努力を必要とする。異なる主張をもった市民が多数おり、統一した見解を導き出すことが不可能だからである。しかし、オーストラリア博物館は「これらの問題に消極的にならず積極的に関わり問題提議していくことが我々の使命である」といった力強い意思を持って展示を開催している。展示内容は先住民の代表者など、市民を含めた検討会を開催し検討を度々重ねたとの事である。市民に開かれた事前協議の重要性がこのような展示を行う場合は必要不可欠なのだろう。

〈株式会社 丹青社 第1デザインセンター 斎藤克己〉

調査・企画・デザイン・設計・製作・施工・
監理・運営およびコンサルティング・プロデュース

より良い「社会交流空間づくり」にむけて…。

株式会社 丹青社

〒110-0005 東京都台東区上野5-2-2 TEL 03-3836-7221(代表)
札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・鳥取・福岡
URL <http://www.tanseisha.co.jp>

INTERIOR/EXTERIOR/DESIGN/EQUIPMENT ONY KOBO CO.,LTD.

東京都千代田区神田神保町2-40-5 東久ビル
TEL(03)3221-1102(代) FAX(03)3221-1185



動物園/水族館/博物館
企画・設計・施工

本社 〒151 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル
-0051 TEL.03-3350-6725 FAX.03-3350-6745
株式会社 **東京サイエンス** ショールーム 紀伊國屋書店新宿本店1F TEL.03-3354-0131(大代表)

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



Fossils, Minerals & Rocks

地学標本(化石・鉱物・岩石)
古生物関係模型(レプリカ)

大英博物館/恐竜復元模型

縮尺:実物の40分の1 精密教育用モデル、大英博物館製作による刻印入

「全科協ニュース」を皆様の情報交換の場としてご活用
ください。資料や情報の提供、標本などの借用希望、事
業案内、ご意見、ご提案など皆様の原稿をお待ちしてお
ります。

編集後記

9月号の特集は、秋田県立博物館が担当しました。
次回は、神奈川県立生命の星地球博物館の担当です。
ご期待ください。

このニュースは再生紙を利用しています

感じる科学

動刻

▲恐竜ロボット
ティラノサウルス



▲人体型ロボット
コスモ博士(富崎科学技術館)

文化施設・商業施設・ディスプレイ企画・設計・施工

kokoro 株式会社ココロ

〒205-0023 東京都羽村市神明台4丁目9番1号
TEL0425(30)3911(代)・3939(営業)
FAX0425(30)3900・3927(営業)